

ひとりひとりに自己学習力を －関心・意欲を高めることから始める地理学習の試み－

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇（地理）

1 はじめに

毎日の地理Bの授業の中で、残念ながら、目を離すとすぐに机を離れようとする生徒、やる気なく教科書も出さない生徒、授業始まりの号令が終わるとすぐに机に突っ伏してしまう生徒たちがしばしば見受けられる。

生徒に聞いてみると、どんな教科・科目でもいいから授業が楽しみであるという生徒は10人に1人（10%）、地理でも歴史でもいいから地歴科が好きであるという生徒は25%、定期試験前に地理Bの試験勉強をするという生徒は20%にすぎなかった。この傾向はここ数年共通である。そうだとすると、積極的な学習態度はなかなか期待できない。また、地歴科が嫌いな理由を尋ねると、「覚えることが多くていやになる」「暗記ばかりでつまらない」「暗記しないと良い点数が取れない」という答えがほとんどである。好きな理由を尋ねても、多くは「事項を記憶すれば良い点数を取れるので勉強がしやすい」というものであった。

この状況を打破すべく自分なりに工夫を繰り返しているつもりであるが、なかなかうまくいかないものである。

2 主題の設定

〇高校は1学年3クラスの小規模な学校である。園芸科1クラス、普通科2クラスで、1学年120人、全校生徒を合わせても360人にすぎない。しかし、残念ながら、その多くは学習意欲に燃えて入学してはこない。この生徒たちの関心を何とか少しでも学習に向かせたい、そして少しでも地理的なものの見方・考え方を身に付けさせ、自己学習力を高めさせたい、そう考えて実践に取り組むこととしたい。それぞれの実践の前後でアンケート等により生徒の変容の状況を把握し、検証し、あらかじめ定めた観点から実践を総括したい。

75%の生徒が地歴科が好きではない



地理の1年間の学習の全体への導入として、実践1（メンタルマップ、国名クロスワード、国名の由来調べ）により、関心・意欲を高める



実践2（世界の国の紹介）により、関心・意欲を高める＋情報を集め活用し、調べたものを発表する力を培う



特色ある学校作りと関連させながら実践3（地域調査）に取り組み、作業的・体験的学習により地理的技能や見方・考え方を培う



生徒から出た質問に答える形で実践4（地図化してとらえる現代世界の諸課題）に取り組み、問題解決的学習により、地理的技能や見方・考え方を培う＋自己学習力を高める



興味・関心を持ち、地理的な技能や見方・考え方を習得した、自己学習力の身に付いた生徒へ

3 指導計画上の位置づけ

(教科書：新詳地理B，帝国書院)

1 学 期	地理Bへの道案内……………実践1：4月当初に導入として実施 第1部 自然と生活(現代世界の系統地理的考察)……………実践2：「国家規模の地域」への導入として5～7月に実施 ア 自然環境 イ 資源，産業 ウ 都市・村落，生活文化
2 学 期	第2部 世界の諸地域(現代世界の地誌的考察) ア 市町村規模の地域……………実践3：9月に地域調査を実施 イ 国家規模の地域 ウ 州・大陸規模の地域
3 学 期	第3部 グローバル化する現代世界・地球的な課題(現代世界の諸課題の地理的考察) ア 地図化してとらえる現代世界の諸課題……………実践4：1月に実施 イ 国家間の結びつきと課題 ウ 環境，エネルギー問題の地域性 エ 人口，食料問題の地域性

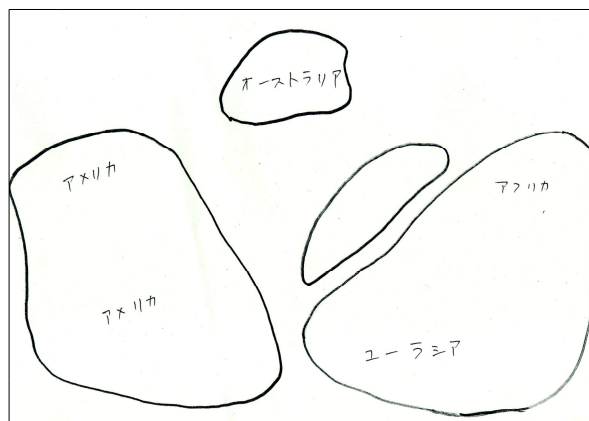
4 実践1ーメンタルマップ，国名クロスワード，国名の由来調べ

○高校では，地理Bを1年生で履修している。4月，入学してきたばかりの生徒に，最初の3時間を使って地理Bの学習へのオリエンテーションを実施する。これからの学習に対する関心・意欲を高めるとともに，知っている国名を増やすなど初歩的・基本的な知識を身に付けさせたい。クラスによっては世界地図で日本の位置がわからない生徒が2割(○人)いた。少しでも正確な世界地図と，より多くの国名になじみ，身に付けてもらいたい。そしてこれ以降の学習への橋渡しをしたい。

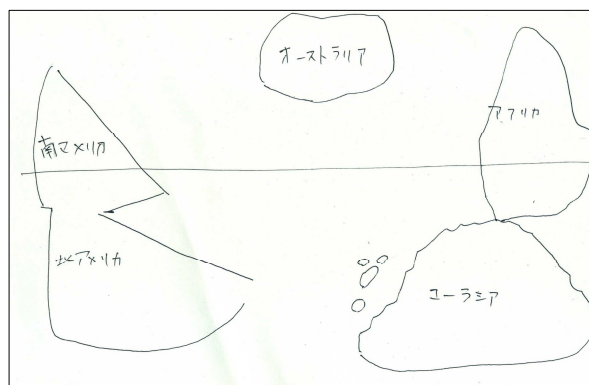
(1) 学習活動の概要

ア メンタルマップを描こう

南を上にした世界地図を教科書等を見ずに描く。北が上の地図に慣れた生徒たちは常識を揺り動かされ，動揺する。それと同時に，どんなものが描けるか，描いてみたいと盛り上がる。また，描くことによって，自分の世界認識を問い直すことにもなる。『自分の世界地図では他の地域に比べてアフリカが不正確である』『北米大陸だけはいやに正確である』『自分は世界地図をどこを中心に描いたのか』などの自分の知らない自分の認識の特徴に気付くことができる。太平洋中心の世界地図と大西洋中心の世界地図を並べて示し，その背景にある考え方を問いかけることもできる。生徒たちに聞くと，90%の生徒が興味をひかれ面白かったと感じていた。「世界地図は知っているつもりだったが，いざ自分で描いてみるとぜんぜん描けなかった」「やっぱり自分も日本を中心にした世界地図を描いていた。先生のいったとおり，人は知らず知らず



略地図練習前のメンタルマップ



略地図練習後のメンタルマップ

のうちに自分を中心にして世界を認識しているのかもしれない」「日本の位置が正しくなくて、なんだか恥ずかしかった」「ユーラシア大陸とアフリカ大陸がつながっているなんて知らなかった」「自分の小学生並みかもしれないと思ってたけど、隣の人のはそれを超えていた」「アメリカ合衆国の日本よりの海岸のところにチリがあると思ってたけど、本当は違った」といった様々な感想が寄せられた。「自分がよく知らない大陸、地域のことを特に知りたい、勉強してみたい」という積極的な感想もあった。

イ 世界の略地図の描き方を練習する

メンタルマップを描いた後、正しい世界地図を描けるように、白地図等を利用して世界の略地図の描き方を練習する。自分の書いた世界地図や隣の席の生徒の書いた世界地図と見比べながら、生徒は楽しく練習していた。（前頁の図はメンタルマップの例、上段は略地図練習前のもの、下段は略地図練習後のもの、ほとんどの生徒に向上が見られた。）

ウ 国名をあげ、それを地域分けする

まず、自分の知っている国名を羅列させる。そして、それを地域ごとに色分けしてみる。そうすると、国名がたくさんあがる地域とそうでない地域、自分の知らない地域があらためて確認できる。少ない生徒で20～30前後、多い生徒で80前後の国名があがった。地域別では、どのクラスでも半数前後の生徒が、ヨーロッパの国名が一番多くあがったと答えている。やはりアフリカの国名があがらない。アジアも思ったよりあがる国名が少なかった。「それは何故か」等をこれからの地理の授業に生かしたい。理由をさぐる中から、私たちの地理的な世界像の見直しや、国と国との交流のところでの学習等に展開していきたい。

エ 国名探しクロスワードパズル

次に、クロスワードパズルを用いて国名探しをする。市販の教材などにも見られるので、そういったものを利用してよいと思うし、自分でも作成できる。レベルも初級と上級など、2種類程度用意するとよいと思う。クリアすべき国名数をあらかじめ決めておいて、まず自分の力で解いた後、地図帳等を利用して解く。初級を終了した生徒は上級に進む。生徒はお互い競いあって楽しく解き始める。どのクラスでも90%以上の生徒が「楽しい」「楽しく国名が覚えられて役に立つ」「知っている国名が増えた」と答えている。

オ 国名の由来を知る

クロスワードで、知っている国名を増やした後、その国名を分類して「～スタン」「～ア」「～ネシア」「～ランド」等の共通項を見つけ、その地名接尾語の由来を学習する。国名の由来を学習した後、「ほかに～スタンのつく国名の例はないか？」と生徒に問いかけると、積極的に国名があがる。（右：授業展開例）

（2）分析

一連の授業について生徒に意見を聞いてみると、「楽しく学習ができたか」「世界地図が以前より正確に描けるようになったか」「知っている国名が増えたか」という問いに対し、大変良い反応が返ってきている。また、「これから学ぶ地理の学習が楽しみだと思えるか」との問いにも良い反応が返ってきた。「自分の知らない地域がはっきりとわかったので、そこにより気を付けて学習したい」という前向きな感想も寄せられた。授業の様子を見ても、生徒は熱心に、協力しながら学習に取り組んでいたと思う。関心・意欲を高めるということと、国名等の基礎的な知識を広げるという

＝「国名の由来を知る」の授業展開の例＝

Q：共通する部分を持っていそうな国名をあげよう、間違ってもかまわないからどんどん発言して

A：アフガニスタン、カザフスタンはどう？

Q：共通する部分は？

A：両方ともスタンが付いている

Q：では、そのスタンはどんな意味か、調べてみよう

A：ペルシア語で「～の国」「～の土地」の意味

Q：スタンの付く国は他にもあるかな？

A：トルクメニスタン、ウズベキスタンなんてのがあ

目的はクリアできたと思われる。

5 実践2－世界の国の紹介

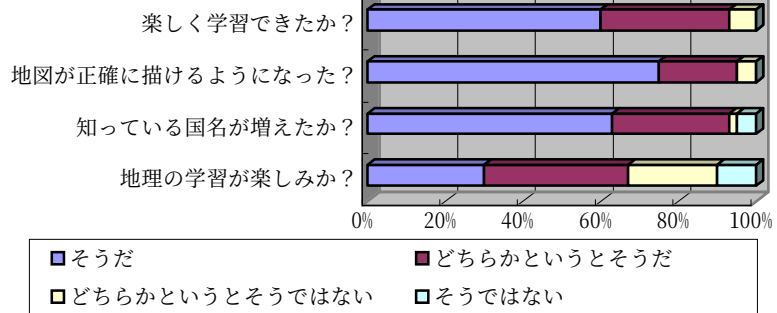
次の実践は「5分間で世界の国を紹介しよう」というものである。生徒一人一人に国を一つ選ばせ、その様子を調べさせ、授業の最初の5分間を使って発表させる。「(2)現代世界の地誌的考察」中の「イ 国家規模の地域」への導入として位置付けて取り組みたい。

5月から7月までの授業を使って40カ国の紹介をした後、「イ 国家規模の地域」の学習に入るように計画する。実践1と同様に興味・意欲を高めるとともに、資料に親しみ活用すること、すなわち地理情報を主体的に活用すること、そして、報告書にまとめたり、発表したりする力、表現力を身に付けさせることを目的に考える。

生徒は、生徒同士の発表だとしてよく話しを聞く。また、彼はどんな国を選んで調べたのか、友人関係の中で興味を持つ。選んだ国について本やインターネット等を使って情報を集め、取捨選択し、まとめ、それを発表する。そうすることで上記の目的を達成したい。

(1) 学習活動の概要

まず、地域を地誌的にとらえるには、多様な事象を項目ごとに整理する方法(項目別アプローチ)と、特徴的な事象を有機的に関連付けて整理する方法(テーマ別アプローチ)があることを、教科書を用いて生徒に学習させる。その上で、生徒は、自分が調べてみたい国を他と重複しないように一つ選ぶ。本やインターネット等を用いて調べ、まとめる。発表時間が短いことを考え、コンパクトにまとめ、1時間毎に一人ずつ5分程度で発表する。発表した生徒は自己評価を行い、発表を聞いた生徒も評価票に記入する。まとめて発表する内容は、ある国について関心を持ってもらうことを目的に、全体像ではなく、ある側面・断面に限って5つのキーワードを用いて紹介することとする。また、資料を集め活用するという点で、以前の実践の際には生徒にとまどいが見られたので、今回の実践の際には、学習の進め方や注意点等を記したプリントを配布するとともに、生徒を個別にまわって一緒に調べ検索するということを徹底した。



生徒のあげたキーワードの例

ブラジル コーヒー、アマゾン、「ブラジル」の由来、リオの巨大キリスト像、熱帯だけじゃない
インド IT、二桁のかけ算、身分制、イギリスの支配、インダス文明
ドイツ 実は農業大国、牛乳、じゃがいも、小麦、ぶどう

生徒のレポートから(部分) スペイン

・一日に5食 スペインでは日本と異なる時間に食事をする。朝食：起きがけにパンなどをとる。朝の軽食：午前11時頃、サンドイッチ等を食べる。昼食：一日のメインで、午後2時頃フルコースを食べる。(中略) もっとも若い人たちの間では食習慣も変わってきているらしいが。

・フランコ将軍 ①スペイン内戦は、1936年7月から1939年3月までスペインで起こった戦争。左派の人民戦線政府と、フランコ将軍の右派が争った。図式化すると人民戦線＝反ファシズム＝ソ連＝国際義勇軍v.s.フランコ＝ナチスドイツ＝ムッソリーニのイタリアとなり「第二次大戦の前哨戦」と言われる。(中略) ④死後やっとスペインは民主国家として生まれ変わった。

・オリーブ 比較的乾燥に強いことから、地中海で広く栽培されている。オリーブは平和の象徴とされることが多い。旧約聖書によると洪水の後、陸地を探すために放たれた鳩がオリーブの枝をくわえて帰ってきた。次に、オリーブの栽培される地中海性気候について説明しよう。(以下略)

・闘牛 闘牛はスペインでは国技とされ盛ん。牛の興奮をあおるのに赤い布を使っているが、実際には牛は布の動きを見て興奮している。（以下略）

・アルハンブラ宮殿 イベリア半島での最後のイスラム王朝＝ナスル朝に建設された宮殿。（中略）現在のスペイン国家はレコンキスタによって建てられたカトリック国家であるが、現実にはスペイン文化はイスラムにその多くを負っている。イスラムは8世紀から実に800年にわたってスペインを支配したのである。

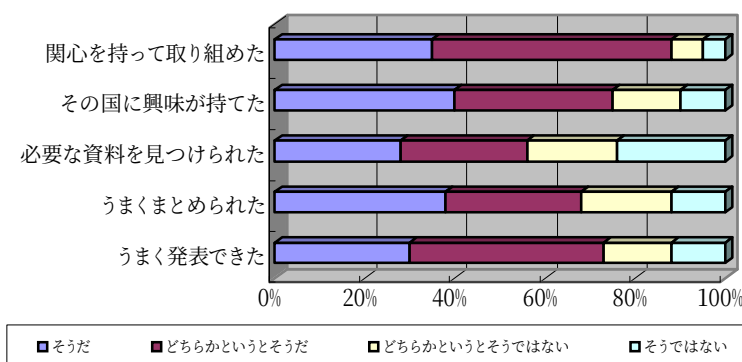
上のレポートに対する自己評価	
自分でやってみてどうだったろうか？	（ 頑張れた→☆☆☆， うまいかなかった→☆ ）
一生懸命やった，頑張った	（ ☆☆ ）
その国のことをいろいろとたくさん調べられた	（ ☆☆ ）
調べたことをうまくまとめてみんなにわかりやすく発表できた	（ ☆☆ ）
以前に比べてその国のことがよくわかった	（ ☆☆☆ ）
上の発表を聞いた生徒による評価	☆→☆☆☆
一生懸命やっている，頑張っている	平均して☆が2. 7
その国のことをいろいろと調べて紹介している	平均して☆が2. 7
適切な資料を適切にまとめ，わかりやすく発表している	平均して☆が2. 4
その国のことをよく理解している	平均して☆が2. 7

（２）分析

生徒にとって、インターネット等を用いての調べ学習はとても楽しいようである。また、生徒同士の発表の場合、生徒は教員の話などより、よほどよく話を聞く。発表者の「何か質問はありませんか？」に対しても大変よく質問が出てくる。80%を超える生徒が、「学習活動に関心が持てた」と答えている。「その国のことをより知りたくなかったか、興味がわいたか」「ほしい資料を見つけられたか」「集めた多くの資料をポイントを押さえてうまくまとめることができたか」「自分なりにうまく発表できたか」という問いに対しても多くはプラスの評価をしている。関心・意欲を

高めるという点で効果は高かったと思われるが、情報を主体的に活用し、まとめ、発表する力をつけさせるという点では、効果をあげるために、生徒と一緒に調べたり自信のない生徒と発表の練習をしたり等、かなり個別に指導することが必要であると思われる。また、発表の時間を短く設定してあるため、どうしても中途半端な内容になってしまう傾向がある。そのため、その国の全体像ではなくて、ある特徴を切り取るようにして欲しいと指導した。あくまでも導入として位置づけたい。もし時間的な余裕があれば、自分がまとめたレポートと発表内容を振り返らせ、うまいかなかったところや不足のところを次にどう生かしたらよいかを考えさせ、その上でさらにもう一度別の国について学習させ発表させる機会をつくることができれば良いとも感じた。

実践2に関するアンケート



6 実践3—地域調査

本校では、特色ある学校づくりを進めるにあたって、その一つとして、総合的な学習の時間の中に位置づける形で、地球環境の保護に関する学習を実施している。環境保護に関する学習

は、ビーチコーミングを楽しむということと、ウミガメの保護ということの2点を軸として、計画されている。ビーチコーミングとは、砂浜で漂着物等を観察し海に親しむことで、本校では同時にゴミ等を拾う美化活動も行っている。講演会等でも環境について学習し、ビーチコーミングを年2回実施した後は、文化祭で有志によるプロジェクトチームを作って学習の成果を発表している。「(2) 現代世界の地誌的考察 ア市町村規模の地域」の中で地域調査を実施する際に、このビーチコーミングを取り込み関連させた上で、地理的・地誌的方法に慣れ親しみ、身につけることができるよう指導したい。生徒の興味・関心の高いビーチコーミングと関連させる形で、生徒の意欲を引き出したい。その上で、地域について調べる事柄を自分たちで考え、資料にあたり、まとめ、学校周辺を歩き、考察する。実践1と2で培った力を背景に、「情報を主体的に活用する学習」や「作業的・体験的学習」「資料に親しみ活用すること」「発表したり報告書にまとめたりすること」に取り組み、地理的な技能や見方・考え方の習得に迫りたい。事前に観点別の評価規準を示し、自己評価も実施する。

(1) 学習活動の概要

ア ガイダンス

まず、教科書を用いて、事象を有機的に関連付けるかたちで多面的・多角的に追求する地誌と、事象を項目ごとに整理するかたちで多面的・多角的に追求する地誌とがあることを再確認させる。次に地図を配布し、学校周辺＝旧岬町＝現いすみ市について知っていることや興味を持っていることをあげさせる。そして、何について調べたいか、調べるべきか、意見を交換してもらい、整理する(右上表)。なお、必ず調べて欲しい事項はあらかじめ設定しておくが、生徒との会話の中から展開していくと、意外とこちらの思惑から、はずれないものである。

イ 調査

班別に分担を決めて、図書室や情報処理室で書籍やインターネットにより調査するとともに、地図を片手に周辺を歩く。右の地図は、巡検のコースを記したものである。全部で4コース設定した(下記のA～CコースとDコース)。生徒たちは、白抜きされた地図を片手に、配布されたプリントにも書き込みながら歩く。(コースは右図の太線部分、1:25,000, 上総長者, 平14更新, 約80%に縮小)

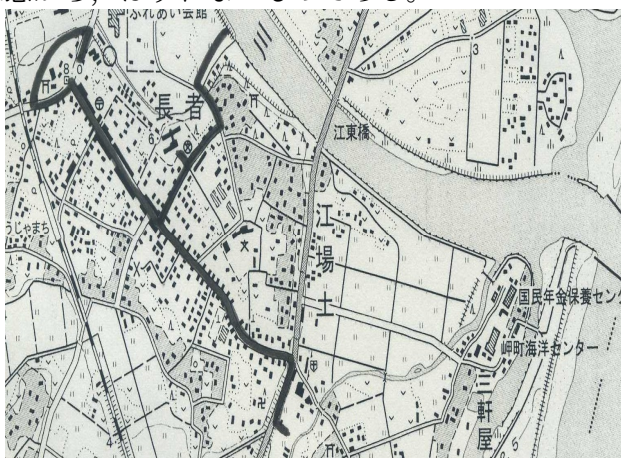
ウミガメの産卵地守ろう



(千葉日報, 2007/07/06)

生徒からあがった興味のある事柄、調べたい事柄(主なもの)

- ・この周辺でウミガメの産卵する海岸は他にあるのか
- ・ビーチの環境美化はどこでどんなふうに行われているか
- ・最近のサーフィンのブームと、サーフショップの立地
- ・コンビニや大型店の出店と、周辺への影響
- ・名産の梨はこの学校周辺でもあるのか、その由来も
- ・夷隅川はどこから流れてきているのか
- ・「太東崎が護岸されたため、周辺の砂浜がやせている」それは本当なのか



地域調査 巡検Aコース(ちょっと急ごうコース): 地図の見方, 地図記号を確認するコース

①学校の標高は何メートルだろうか? 地図上で、その数字を赤ペンで印そう→②長者商店街で、白抜きになっている場所には何があるか、確認して、地図に地図記号で書き込もう→③神社の鳥居の前にある記号は、何の

記号だろうか？→④J R外房線は、複線か単線か、またその地図記号は何か確認しよう→⑤天神社周辺の市の役所類・建物類を地図に書き込もう→⑥学校へ ⑦他に何か気付いたことがあったら書こう ⑧コースを巡った感想を書こう
.....

地域調査 巡検Bコース（のんびりコース）：夷隅川周辺の地形や土地利用を確認するコース

①  は何か？その高さはどのくらいか？→②  は何か？→③川の西側付近の土地利用を観察し、地図に記号で書き込む→④川の東側付近の土地利用を観察し、地図に記号で書き込む→⑤灯台の方角を地図に矢印で書き込む→⑥学校へ ⑦他に何か気付いたことがあったら書こう ⑧コースを巡った感想を書こう
.....

地域調査 巡検Cコース（かなり急ごうコース）：SCと古くからの商店街の様子を確認するコース

①長者商店街の様子を観察して、考えたことを書こう→②長者商店街の中で、この家の構えだと昔は絶対商店だったな、という家は何件ぐらいあるか？→③大型ショッピングセンターを簡単にスケッチしよう→④今は（ ）時（ ）分で、お客さんにはこんな感じの人たちが多い ⑤他に何か気付いたことがあったら書こう ⑥コースを巡った感想を書こう



（水準点を確認する）



（夷隅川にて周辺の土地利用等を確認する）

ウ 中間まとめ

各班で、分担した事柄について調べ学習したことを一旦まとめるとともに、さらに調べることが必要なものについて、意見を交換して追調査する。この時点ですべての班の下書きをチェックし、今後の調べ学習についてアドバイスする。

エ ビーチコーミング

総合学習の時間に、和泉浦海岸でビーチコーミングを楽しむ。その際、巡検Dコースのプリントに書き込み、まとめる。

地域調査 巡検Dコース（ビーチコーミングの往復コース）：夷隅川の学校～河口部を確認するコース

①学校を出発して、国道を渡る前、神社の入り口の奥には何がある？→②国道を渡るところにある橋（江東橋）の向こう側には何がある？→③国道～河口部の道は、何の目的でつくられた道か？→④河口部で見ることの出来るレジャーはどんなもの？→⑤河口部で海を背にして右側、左側にはそれぞれ何があるか？→⑥灯台の方角を矢印で書き込もう ⑦他に何か気付いたことがあったら書こう ⑧コースを巡った感想を書こう

ビーチコーミングを実施した結果については、有志により編成されるプロジェクトチームが、分析してまとめて、文化祭で発表することになる。

オ 地域調査のまとめと発表

最終的に報告を班でまとめて、お互い報告しあい、その報告を冊子にまとめて、その成果をクラスで共有する。また、学習活動の中で、興味を持った生徒有志が、夷隅川について実際に

生徒のレポートから（部分）－やせ細る九十九里浜

①九十九里浜は沿岸流がとても強く、常に削られる動きが見られる。九十九里浜に土砂を供給してきたのは、おもに屏風ヶ浦と太東岬だが、昭和40年代以降護岸工事が進み、九十九里浜にそそぐ川の護岸とともに、土砂の供給が極端に少なくなり、砂浜の後退が進んでいる。一宮海岸では1960年代までは100mを超える広さの砂浜があったというが、「今ではとても狭くなってしまって、どう考えても、とってもそんなにないよ」（サーファーの〇〇君談）。

②海水浴場は、33(1995)→21(2005)に減った（朝日新聞より）。

③1979年以降ヘッドランドをつくっているが、後退は止まっていない。



学習を始める前には、中学校で何らかの形で地域調査をやったことがあるのは1/8に過ぎず、また地元＝旧岬町出身の生徒が25名（全体の20%）しかいないこともあり、

実践3に関するアンケート

Statement	そう思う (%)	どちらかというと思う (%)	どちらかというと思わない (%)	そう思わない (%)
地域調査には興味を持てた	40	38	18	4
巡検には興味を持てた	42	45	10	3
調べて発表するのは楽しかった	22	35	40	3
資料はうまく見つかった	25	32	38	5
資料をうまくまとめられた	32	40	25	3
みんなで協力できた	36	30	28	6
うまく発表できた	45	35	15	5

地歴公民-3-8

らないことを確認しながら、資料を調べてまとめたり、発表することも、生徒はうまくできていると思っている。しかし「講義を一方的に聴いているのは楽」だし、自分で「ネットで調べるのはかなり大変」だ、という傾向も同時に見られた。以前からの学習に向かう姿勢から比べると確実に向上していると思うが、それでも積極的な学習を引き出すのはなかなか難しいものと言わざるを得ない。

7 実践4－生徒の質問から展開した問題解決的学習

生徒が日頃から疑問に思っていることや興味を持ったことと関連させて学習活動を展開する、そうすることで生徒が学習にも意欲を持って取り組む。そういった努力が大切であることは良く指摘されるところである。地理の授業の中でも、生徒の授業中の発言に注意を傾けて、それらをどんどん取り上げて授業に生かすべく日頃から努めているところであるが、州・大陸規模の地域を学習する中で、生徒の中から「日本だけがH I V感染が増えてるんでしょ、どうしてなの？」という発言があった。年度当初には、生徒の発言は授業に関係のないものが多く、「無駄話はしないように」と指導することが多かったが、授業を進めるうちに、だんだんと学習内容に関係がある発言、T Vニュースで見たことに関係した発言等が出てくるようになってきた。今回も、生徒からのこの発言を授業で生かそうとして調べてみると、H I V感染の問題は、南北問題の一面を良く表していることがわかる。そこで、これを「(3) 現代世界の諸課題の地理的考察 ア地図化してとらえる現代世界の諸課題」の中に位置づけ、授業を展開したい。資料を集め、意見を出し合いながら分析し、途上国の中の多様性等に気づき、さらに学び方を学び、思考力を培い、自己学習力を高めるという構成を考えてみたい。パソコン室と図書室を利用して、生徒とともに考えながら調べる授業を展開してみたい。H I V感染の問題は、生徒の関心・好奇心が高く、その関心の高い問題から展開できるので、学習意欲も高まるのではないかと期待したい。

(1) 世界のH I V感染率の一覧と一人当たり国民所得の一覧を作成し、比較する

まず、世界のH I V感染率の一覧を調べた。生徒に、数字の羅列では分かりづらいのではないかと問うと、今度は世界地図を色分けして主題図を作成してきた。そして、その図から何が読みとれるかを話し合ってみる。すると「感染率の高低は地域ごとにまとまっているかもしれない」「先進国は感染率が低い気がする」「途上国の中には感染率が高い国がある」「もしかすると、経済の問題と感染率には関連があるかもしれない」等の意見が出てきた。それらをまとめた上で、次にどんなことを調べたら良いかと問うと「経済格差がわかる資料が見たい」ということで、一人当たり国民所得の一覧を探してみることにした。2枚の主題図を比較してどんなことが読

配布プリント H I Vと南北問題（今までの学習のまとめ）

世界のH I V感染率の一覧と、世界の一人当たり国民所得の一覧から読みとれること

① 経済の状況と、H I V感染率の高低には関連がある

② 途上国の中でもH I V感染率には差がある

次に調べてみたいこと

① 経済の状況とH I V感染率に関連があるのはなぜだろうか？

② 先進国と途上国、それぞれでのH I V感染者の状況を調べよう

③ 途上国間でH I V感染率に差があるのはなぜだろうか？

④ 南北の経済格差は、そこに住む人々の生活にどのような影響をもたらしているだろうか？

調べた内容をまとめる、そして、調べて感じたこと・考えたこと・疑問に思ったことを書こう

みとれるか議論した後、「経済の状況とH I V感染率には関連がある」「途上国の中でもH I V感染率には差があることがわかる」に気付き、今後調べる項目を前頁のようにまとめた。

(2) H I V感染の問題についてまとめる

この実践は、H I V感染率の問題を導入にした南北問題への取り組みであるので、H I V感染の問題については、あまり深入りしないようにここでまとめてしまいたい。

生徒のレポートより（部分）－ブラジルのエイズ対策について

ブラジルでは13歳から49歳の年齢層でのH I V感染率は10万人あたり140人（01年）です。ブラジルのルラ大統領は、コピー薬を導入することを決め、欧米ともめています。無料のエイズ治療を実施しているブラジルですが、知的所有権と貧困の問題とのバランスをどうとるか、難しい問題を提起したと思います。

生徒のレポートより（部分）－日本のH I V感染の状況について

日本におけるエイズ感染者の増加は、一つの原因は若年層の性行動の多様化にある。初めてセックスする年齢が早くなり、経験人数も増えていること、オーラルセックスの日常化、不特定の相手とセックスする場合ほどコンドームの使用率が低いことなどが、複数の性行動調査によって明らかになっている。京都大学大学院の木原雅子准教授は、この状況を「活発化・ネットワーク化・無防備化」という言葉で表している。

生徒のレポートより（部分）－経済格差がなぜ感染に結びつくのか

サハラ以南アフリカのH I V感染率の高さは群を抜いている。それは、①貧困と社会の不安定化とそれによる家族の崩壊を全体的な背景として②性行為感染症の高レベル③女性の地位の低さ④多い性的暴力⑤感染拡大期での効果的なリーダーシップの欠如⑥移民労働と結びついた高い人口の流動性、とまとめることができる（UNAIDSのレポートより引用）。

報告を聞いた後に感想を話し合ったが、生徒からは「レポートの中にあった『エイズは貧困や差別といった人類にとって最も手ごわい問題につけ入りながら拡大している』という言葉が重い」「『エイズ問題への無知と問題の存在を否定する態度が一番の問題だ』という言葉が紹介されていたが、本当にその通りだと思った」「『エイズは問題のある悪い行動の結果だ、だから本人の責任だ』という見方は、絶対にしてはならないとわかった」「これからの社会はいろんな問題を解決していかななくてはならないので、本当に大変だと思う」といった意見が出された。

また、より深く考えるべきこと、調べるべきこと、発展的課題として「エイズ治療薬の特許とコピー薬の問題を考えていかななくてはならない」「感染者を差別したり排除したりするのではなく、感染者を受け入れる社会をつくるための方策はあるのか」「そもそも受け入れるとは具体的にどんなことなのか」といったものが出された。

(3) 経済格差＝南北問題について考察する

生徒のレポートより（部分）－南北問題のまとめ

旧宗主国は、植民地にモノカルチャー経済を強制した。第二次大戦後もその経済構造は大きく変わっていない。比較的付加価値が高く高価な工業製品と、安価な農産物の差は開き、経済格差が生じている。これを南北問題と呼ぶ。途上国も工業化をしようとしたが、先進国にかなうはずもなく、債務だけが残った。途上国の中にも工業化のうまくいった国、資源の豊かな国とそうでない国との間に格差がある。資源の豊かでない国は特に大変で、人々は大変な生活を送っている。

生活のいろいろな面についての格差について、調べたものをお互い報告し合う。すると、「安全な水を確保できる割合」「就学率」「高等教育機関への就学率」の他、「人口増加率」「乳児死亡率」「高齢化」「平均寿命」「栄養摂取の状況」についてそれぞれ格差があることが報告された。その後、感想や疑問等を話し合った。「生活のあらゆる面について格差があることがよくわかった」「先進

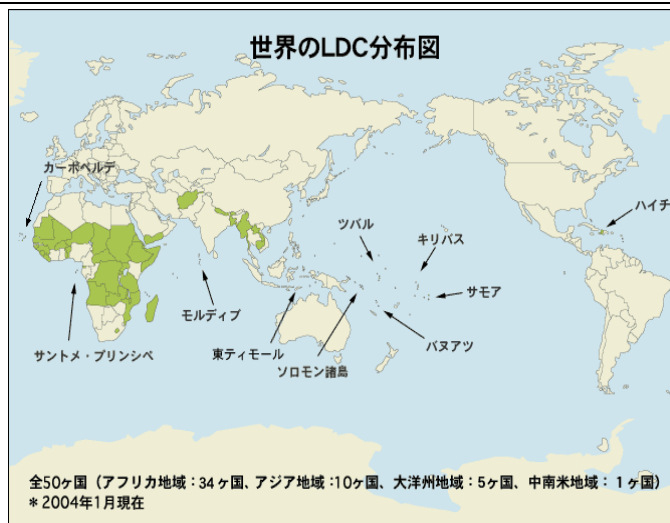
国に生まれて良かった」「南の開発途上国の中にも経済的に豊かな国がある」「なぜ世界の人たちは何もしないで、この南北問題について放ってあるのか」「なぜこんなに経済や生活に差があるのか、その原因は何だろうか」等の意見や疑問が出てきた。

(4) 南南問題について考察する

生徒は、今までの授業の中で、「途上国の中にもH I V感染率に差がある」「開発途上国の中でも、経済的に差がある」「それを南南問題と呼ぶようだ」ということを学習してきている。

生徒のレポートより(部分)－南南問題

- ・国連は後発開発途上国を決めている。
(右図は外務省HPより)
- ・資源を持たない国、政治的に不安定な国がほとんどである。
- ・資源を持っていて先進国からの投資があった国は、多くは経済的に発展してきている。しかしそうでない国はおいていかれる。
- ・独裁政治、民族紛争と内戦、昔の植民地経営による悪影響など、問題はどう解決していいのかわからないくらい大変である。



生徒からは「問題が重すぎる」「長い歴史があるということは、解決にも時間がかかるということじゃないか」「自分がいかに恵まれているかよくわかる」「何かしてあげなくてはいけないけど、何をしたらいいのか全く考えつかない」「政治家はしっかりしてもらいたい」「政治家じゃなくて、国民がしっかりしないといけない」といった意見が出された。そして次に進んだ。

(5) 南北問題の由来と、今、自分たちに出来ることを考える

次に、経済の状況の格差が人々の生活の様々な側面についても格差をもたらしていることに気付いて、生徒たちは「その由来」を調べ、「自分たちに出来ること」の検討とまとめに入った。

「自分たちにできることはないか?」という問いかけには、「大きい問題なので、個人で出来ることはない」という意見が多かったが、調べを進めるうちに様々な取り組みや考え方があることがわかり、活発に意見が交換された。

生徒のレポートより(部分)－私たちにできること

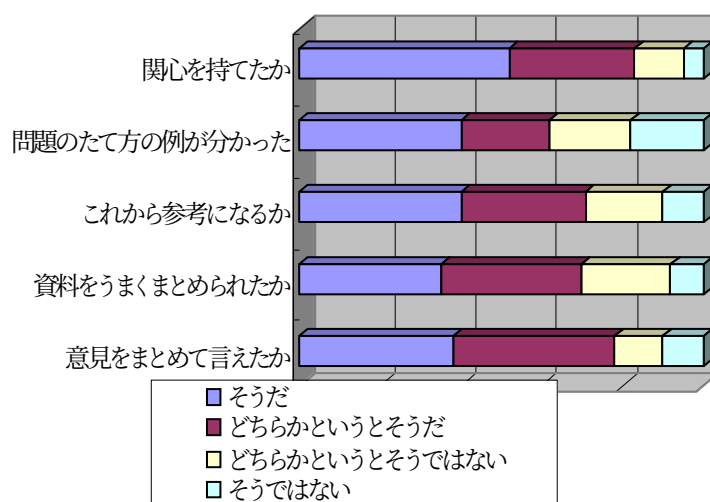
- ・実は、あんまりないと思う。政治家のレベルの問題だと思う。
- ・現実を「知る」ということが一番大事だと思う。「知る」ことからじゃないと始まらない。
- ・フェアトレード運動というのを初めて知った。自分にもできると思った。
- ・新聞の広告に「チャイルドスポンサーになりませんか」というのがあった。役に立つかな。
- ・先生から、NPOの運動に興味を持ち、関わり、今カンボジアにいるという教え子の話を聞いた。自分には無理だと思うけど、参考にはなった。

(6) 分析

学習が終わったあと生徒に聞いてみた。「全体として楽しかったか、関心を持って取り組めたか」という問いに対しては80%弱の生徒がYesと答えている。「エイズのことにはみんな関心があると思うので、そのことを授業に取り入れられて良かった」「調べていて勉強になった。身近な問題だと勉強していて楽しい」「自分たちで調べるのは大変だけど、自分たちが知りたいことを調べているので、とても良いと思う」「関心はあるけど、でも、自分たちが調べるのはなかなか大変だ」といった感想が聞かれた。次に「学習する上で、課題の設定の仕方・問題の立て方・問

題の見つけ方が分かったか、身に付いたか」という問いに対しては60%の生徒が、また、「それは、これから自分が勉強していく上で参考になると思うか」という問いに対しては70%が肯定的に答えている。「資料の集め方・調べ方・まとめ方はうまく出来たか」「ちゃんと自分の意見・考えをまとめて、ちゃんと発言できたか」に対しては合わせて70%強の生徒がYesと答えた。興味のある問題を取り上げ、それをリアルタイムで調べ報告し合いながら、さらに調べるべき事柄を議論し、それを調べる。この循環は、深い落ち着いた思索ということには向かないかもしれない。しかし、知的好奇心を喚起するような学習課題にチャレンジする際には、生徒の自己学習力を高めることが出来るし、生徒にとっても魅力的なものであると思われる。

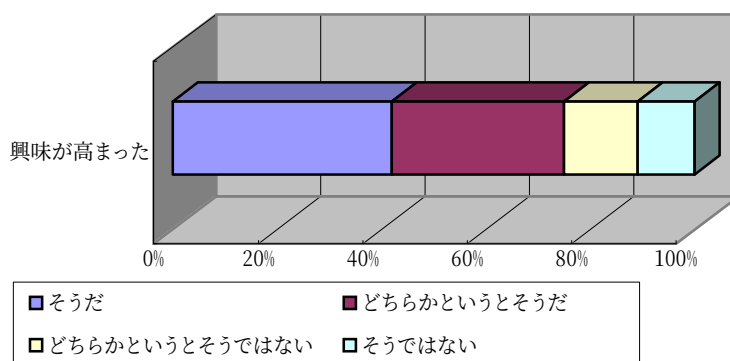
実践4に関するアンケート



8 おわりに一実践内容の総括

いつも「勉強なんてつまらない」「勉強なんてだるい、面倒くさい」「勉強してなんになるの?」と口に出している生徒たちに、何とか地理の方を向けさせたい、何とか少しでも興味を持って学習してほしい、そう考えて実践をスタートさせた。

実践全体に対するアンケート



実践を追うごとに、少しずつではあるが、無駄話ではなく、授業に関する質問や発言が増えてきた事が実感できたように思う。「以前と比べてどうか」という形での感想を自由に書いてもらったが、「自分は地理には向いていないと思うけど、それでも少しは勉強になった」「世界にはほかにもたくさんの国があるので、授業で勉強した以外の国のことも知ってみたい」「以前よりは社会が好きになった」「前よりは授業中発表できるようになった気がする」「先生の話をつただ座って聞くだけでなく、いろいろできたのが良かった、いろいろな形の授業があると良いと思う」という感想が聞けて、大変良かったと思う。「1年間の授業を通じて、地理あるいは地歴・公民科への興味が高まったか」「以前よりは社会に関心を持てるようになったか」という問いに対して肯定的な評価が合わせて70%を超えた。社交辞令が含まれているとしても、うれしい数字である。また、実践2や実践3での生徒の発表を見ても、実践4での生徒の学習への取り組みを見ても、あるいはその実践毎の生徒の感想や意見を聞いてみても、年度当初に比べると、興味・関心が高まるとともに、地理的技能や自己学習力は着実に向上していると思われる。

ここに取り上げた実践は、多くの先生方にとっていずれも見慣れたものかもしれないが、それらを「生徒の興味を高めることから始めて、地理的な見方・技能にふれ、自己学習力を高めよう」という観点から自分なりに実践したものである。お読みになった先生方からのご指導ご鞭撻を是非お願いしたい。